

派遣者番号	29K05	氏名	江崎 一紀
研究主題 —副主題—	「〈自分ごと〉認識」で読む国語科「伝記」指導の開発		
派遣先	玉川大学教職大学院	担当教官	松本 修
所属校	足立区立栗原北小学校	校長	三宅 文夫

キーワード：自分ごと認識 親密 知識 実体験 読書体験

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

中熊豊仁、宮崎幸樹『伝記教材を活用して主体的な読み手を育てる国語科学習指導』（2016）（p. 117）では、伝記学習の価値と課題について次のように述べている。

伝記を教材として取り上げる価値として、「被伝者の行動や生き方と、自分の経験や考えなどとの共通点や相違点を見付け、自分の生き方について考えることができる。」また、実態調査によると伝記学習の課題として、「自分の経験と照らし合わせながら書かれた文章はなく、読み取った一部に対しての直接的な感想が多かった。また、筆者の意図や考えについては、ほとんどの子供が捉えることはできていなかった。これらの要因は次のようなことと考えられる。被伝者の業績は子供にとって偉大であり、自分の経験と関連付けることが難しい。『生き方』をどのように考えていけばよいか分からない。」

伝記学習の課題の解決を図るためには、自分自身に関わる切実なものとして捉える「〈自分ごと〉認識」の視点が求められる。「〈自分ごと〉認識」という概念は、幸坂(2017) (p. 6)によって提示された。読者の世界認識は、抽象と具体、親密と疎遠の四つの軸がある。「抽象」は思想・問題領域のレベルで、主義・主張、倫理、経済などである。「具体」は、具象物のレベルで自分自身や犬、ご飯などである。「親密」は、身近だという感覚をもつことである。「疎遠」は、身近ではないという感覚をもつことである。この中で、筆者の世界認識と読者の世界認識が「親密」だと位置付くことを〈自分ごと〉としている。この自分自身に関わる切実なものとして捉える〈自分ごと〉として引き受けることが伝記学習の課題の解決につながると考える。そこで、子供が伝記を読んで、「〈自分ごと〉

認識」を働かせるための読みの視点が重要である。「〈自分ごと〉認識」を働かせるための視点として、中熊・宮崎『伝記を読んで自分の考えを書く』（2016）（p. 120）の三つの視点を取り上げる。それは、「実体験、読書体験、知識」である。この三つの視点を活用して伝記を読み進めることで「〈自分ごと〉認識」が働き、読者と被伝者が親密になる。親密になることで、伝記を読んで子供たち一人一人が被伝者の生き方や言動、感じ方、考え方を読み取り、自分と被伝者とを比べ、自分の生き方を考えることができるのである。

以上のことから、研究の目的を以下に示す。自分の経験と関連付けたり、自分の生き方を考えたりする伝記の学習の仕方を、「〈自分ごと〉認識」を用いて明らかにすることで、伝記学習の問題点を解決する。

2 研究の内容・研究の方法

研究の内容は、伝記の学習において、知識、実体験、読書体験の視点で読む効果を「〈自分ごと〉認識」を用いて明らかにすることで、被伝者と自分の経験を、関連付けながら読み、自分の生き方を考える価値ある伝記学習を展開するである。研究の方法は、佐藤・左近『伝記教材の学び方 10 のポイント』（2017）（p. 128）と関連させて学習デザインし、検証授業を行う。さらに、グループでの話し合いの様相をプロトコル分析【松本（2004）（pp. 74-82）が示した学習者のグループ学習談話の一定の書式に従う】し、成果を検証する。佐藤・左近（2017）にある伝記教材の学び方における10のポイントは以下である。

- ①人物が生きた時代背景を知る（時代状況と価値観・生き方）。
- ②筆者の主張・メッセージを読み取る（論旨の理解から構成へ）。
- ③筆者の主張・メッセージの背景にある「時代的な価値観・常識的な考え方」を理解する（人物の個性、行動と生き方）。
- ④人物の設定を読み取る（出生と死、職業・生涯等）。

- ⑤選ばれた「エピソードの数と内容」を読み取る。
- ⑥選ばれた「表や図、写真等の資料」を読み取る。
- ⑦自分の立場や興味・関心から「自分の考え」をもつ。
- ⑧自分で選んだ人物について、伝記の「テキスト形式」を生かして論理的に構成する(歴史的、身近な人物等)。
- ⑨発表・交流でさらに「自分の考え」を形成したり、深めたりして、生き方・ものの見方や考え方に生かす(対話的・協働的)。
- ⑩伝記の「テキスト形式」の学び方をメタ評価する。

伝記を読む際に活用する三つの視点について説明する。「実体験」とは、実際に見たり、聞いたり、自分でやってみたりした体験である。被伝者の実体験を読み取り、学習者の実体験と比べて、共通点や類似点、相違点を見つけて自分の考えを書く。「読書体験」とは、被伝者に関する複数の筆者によって書かれた伝記を読んで、考えたり、感じたりした体験である。または、被伝者が異なる他の伝記作品や伝記以外の書物や作品など、幅広い読書から得た情報や知識を用いて学習者が感じたり、考えたりした体験でもよい。「知識」とは、実体験で得た被伝者に関する情報や被伝者の置かれていた社会的背景である。被伝者に関する情報として、被伝者の功績や生い立ち、作品などがある。

授業実践では、被伝者の業績や言動に対して、自分なりの意味付けを考えさせ、「自分の生き方」につながる学習を展開した。自分なりの意味付けを友達と比べることで様々なものの見方や考え方があることに気付き、自分の生活や生き方に生かすようにした。

授業の中での印象深い場面がある。それは、いつも教室での発言が少ないA児の発言である。「おばあちゃんの弟が戦争で死んだ話をおばあちゃんから聞きました。(すすり泣きの声)おばあちゃんは、とてもかわいそうでした。弟もやけどをして、つらかったと言っていました。手塚さんも同じで、とてもつらかったと思います。戦争がなかったら、おばあちゃんや手塚さんや他の人もつらいめに遭わなかったと思います。」

視点「実体験」を取り上げて考えることで、A児は弟を失った祖母の気持ちを考え、手塚治虫の戦時中の気持ちと重ね合わせたのである。そして、普段は人前で自分の気持ちを表

現することは少ないが、教室で涙を流して自分の気持ちを表現したのである。この様子を見たクラスの子供たちは、A児に感情移入した。教室中が、A児の姿に感動したのである。「自分のおばあちゃんだったら」「自分がA児だったら」「自分が手塚治虫だったら」と様々な立場や場面、状況を考えた。A児を介して、被伝者とクラスの子供たちが親密になり、「〈自分ごと〉認識」が働いたのである。

3 研究の結果

学習の振り返りを行った結果を以下に示す。

設問「自分と被伝者を比べるための三つの視点(知識・実体験・読書体験)は、伝記の学習で役に立ちましたか。理由も書いてください。」に対して、55名中53名が「役に立った」、2名が「役に立ったかわからない」と回答した。理由を分析すると三つの視点(知識・実体験・読書体験)を活用した学習をすることで「〈自分ごと〉認識」が働き、伝記学習の課題が解決したと言える。理由を以下に示す。

- ・自分と被伝者を比べることができた。(18人)
- ・人物像への理解が深まった。(9人)
- ・自分の考えが浮かんだ。(9人)
- ・自分の考えを書くことができた。(6人)
- ・もっと読書がしたいと思った。(5人)
- ・もっと伝記が読みたいと思った。(5人)
- ・知識が深まった。(5人)
- ・他の被伝者との共通点を考えることができた。(4人)
- ・自分の考えを伝えることができた。(3人)
- ・自分の考えに根拠がもてた。(2人)
- ・被伝者に懂れるようになった。(2人)
- ・自分の考えが変わった。(1人)
- ・習い事に役に立った。(1人)

4 研究の考察

本実践研究から、主体的な読みを行い、自分の生き方に生かして読む方法を、「〈自分ごと〉認識」により可能にし、伝記学習の課題を解決するための指導計画を開発することができた。課題としては、三つの視点の定着である。子供自身が視点の有効性を認識し、役立つことを実感できるようにするための方策を検討していきたい。

5 今後の展望

「〈自分ごと〉認識」を働かせるためのよりよい方策を他の伝記教材で検証し、実践していく。伝記学習の課題を解決するためのあらゆる可能性について、実践を通して見いだしていきたい。